

(20)川崎東照宮（建国寺）跡 ～長州藩屯所跡～ 北区天満1丁目

☞ 滝川小学校の前に「川崎東照宮跡」という石碑があります。  
 このあたりは、織田有楽斎の邸がありました。徳川家康はこの地によく赴き、有楽斎と共に茶を楽しんだようです。その後、大坂の庶民から豊臣家を忘れさせるため、会報78号で紹介した5代目大坂城主松平忠明がこの地に東照宮を建てました。毎年、家康の命日である4月17日に「権現まつり」を盛大に行っていたようです。川崎東照宮は建国寺ともいわれていました。  
 幕末期、鳥羽伏見の戦いで薩長軍が徳川軍を敗り、徳川慶喜が大坂城より脱出した後、この地に入った官軍(薩長軍)は屯所として、討幕征討將軍の仁和寺嘉彰王が西本願寺津村別院(北御堂)を、薩摩藩兵は東本願寺難波別院(南御堂)を、そして長州藩兵はここ川崎東照宮を屯所としました。  
 明治6年、「徳川憎し」なのか川崎東照宮は廃されて姿を消します。  
 今では、屋根瓦が「造幣博物館」に保存・展示されています。  
 また、松平忠明が奉納した元和在銘灯籠は、大阪天満宮(北区橋2丁目)に保存され、今日でも見ることができます。



川崎東照宮の古写真



造幣博物館に保存されている川崎東照宮の屋根瓦

(21)池上雪枝感化院跡 北区松ヶ枝町

☞ 空心町2丁目にいた神道教導職 池上雪枝は明治14年(1881)この地に非行少年のための少年保護施設を開いていました。240坪の土地に感化院と授産場を開き、神道による精神教化をモットーに勤労の喜びを身につけさせようとしています。  
 俠客 小林佐兵衛の協力で、洋傘の柄やステッキの製造にあたりイギリス人を招き、石鹸を作って売ったりしています。明治24年、雪枝が没した際、閉院となります。



(22)龍海寺 北区同心1丁目

☞ 龍海寺は曹洞宗金剛院の末寺。  
 開山は豊臣秀吉の大坂城築城後、秀吉が越前府中の金剛院 住職 宗鶴を呼び寄せここに開山させました。



龍海寺門前に建てられている「緒方洪庵墓所」の碑

(23) 緒方洪庵 墓 (龍海寺)

☞ 緒方洪庵は文化7年(1810)に備中足守藩の藩医佐伯瀬左衛門の末子に生まれました。15歳の時、大坂に出てきて蘭医 中 天遊にオランダ医学を学び、20歳の時、江戸へ蘭学者 坪井信道や宇田川玄真に教えを乞い、その後26歳になると長崎に行き、オランダ医 ニーマンにつきました。大塩平八郎の乱の翌年、大坂の瓦町で医院を開業。正確な診断、貧富の区別をしなかったことから、次第に名医として評判になります。天保14年(1843)過書町(駈の旗)へ移り、『適塾』を開きます。その後3千人を超す門人を教育し、門人の中から大村益次郎、福沢諭吉、橋本左内、大鳥圭介、佐野常民、長与専斎、高松凌雲、杉 亨二などが出ています。日本の医学発展に大きな功績を残し、文久3年江戸にて過労のため急死します。遺体は東京駒込高林寺に葬られ、遺髪はここ龍海寺に納められました。



(24) 緒方洪庵夫人八重 墓 (龍海寺)

☞ 緒方洪庵の墓の隣に洪庵夫人 八重の墓があります。撰文は佐野常民です。適塾の門人の世話をよくし、福沢諭吉の『福翁自伝』では、福沢諭吉が「泥酔して禪まではずして寝ころがっていたところ八重ににらまれ飛び起き、ひたすら恐縮した」と書いています。



一般公開されている適塾と適塾の隣にある緒方洪庵像 (大阪市中央区北浜3丁目)

(25) 緒方郁蔵 墓 (龍海寺)

☞ 緒方郁蔵は本姓大戸、名を惟高。文化13年(1816)備中生まれ。江戸で坪井信道に学んだ時、緒方洪庵と出会ったことにより後に、適塾に入り洪庵を助け、義兄弟となり緒方姓を名乗るようになります。万延元年(1860)『独笑軒塾』を北久太郎町4丁目に興し、適塾を北塾。独笑軒塾を南塾といわれました。洪庵の死後、適塾一切を指図し 浪華仮病院にも力を貸しています。





(26) <sup>な が てん ゆう</sup>中 天游 墓 (龍海寺)

- ☞ 中 天游は緒方洪庵の恩師にあたります。  
天明2年(1782)生まれ。  
今の西区靱で蘭学塾『思々齋塾』を開き、  
後に京町堀に移りました。医業を妻さだに  
任せ、医学と蘭学の研究に打ち込みました。



(27) <sup>なかなかますじろう</sup>大村益次郎 足塚 (龍海寺)

- ☞ 緒方洪庵の墓のすぐ隣に『大村兵部大輔埋腿骨之址 大阪大学医学部学友会等有志建』と書かれた碑が建っています。  
大村益次郎は、NHK大河ドラマ『花神』(原作:司馬遼太郎)の主人公としてとり上げられた人物。文政7年(1824)~明治2年(1869)。周防の鑄銭司(すせん)村で生まれました。弘化3年(1846)、23歳の時。父の医者継ぐことに決心し、大坂の適塾に入塾します。その時の寓居跡の石碑が、西区土佐堀2丁目に建っています。3年後には塾頭を務めますが、塾をやめ郷里に帰り医者を開業します。



嘉永6年(1853)宇和島藩に招かれ兵書翻訳にあたりながら、蒸気船を造るという偉業を成し遂げます。その後今度は幕府から蕃書調所の教授にも招かれます。  
万延元年(1860)長州藩士となり、藩校教授、軍制・兵制の改革を命じられます。  
前に紹介した(10)の遠藤謹助や伊藤俊輔、井上聞多らをイギリスへ留学させることに成功します。第2次長州征伐の折は長州藩の参謀として高杉晋作同様幕府軍を蹴散らす大きな戦果をあげます。  
明治維新後、新政府に出府し西郷隆盛の下で軍監兼参謀を務め、上野の山に籠った「彰義隊」を大村益次郎の作戦(アームストロング砲の使用)でいっぺんに片付けてしまいます。明治2年、大村は兵部大輔となり軍政改革を断行。廃刀令を強行、徴兵制度を敷いて武士だけでなく広く農民や町民からも徴兵し、国民皆兵を行おうとしているところ、9月4日、京の三条木屋町定宿にて不平士族に襲われ、瀕死の重傷を負います。大坂病院に運ばれ洪庵の長子 緒方惟準や蘭医ボードウィンが治療にあたり、右大腿骨切断手術を受けましたが、甲斐なく手術の9日後11月5日に亡くなります。切断した大腿骨は遺言により、ここ洪庵の墓の横に埋められました。

(28) <sup>かす が さいよう</sup>春日載陽 墓 (龍海寺)

- ☞ 春日載陽は幕末期の医家。文化9年(1812)~明治19年(1886)。  
父の後を継ぎ、大坂の尼崎町に医業を営んでいました。  
大坂の開業医500ある中で、最も繁栄し、嘉永以来名医として評判が高かったようです。儒学は藤沢東暎から学びます。  
その後『医心庵』という塾を開き、医学と儒学を教えます。  
この塾に、坂本龍馬と共に活躍した海援隊士、長岡謙吉が嘉永元年(1848)15歳の時入門しています。その後、春日載陽は、文久元年(1861)備前岡山藩に招かれ在坂のまま藩医となります。

しのざきしょうちく  
(29) 篠崎小竹墓 (天徳寺) 大阪市北区与加阿

江戸後期の儒者、書家。天明元年(1781)～嘉永4年(1851)。9歳の時、篠崎三島の「梅花社」で学び、4年後三島の養子となりました。「梅花社」は小竹の代になり、ますます繁栄し門人1500人を教えていました。藤沢東暎の泊園書院と並んで大坂で2分する学問所となりました。(泊園書院跡の石碑が中央区淡路町1-5にありますが今は新しいビルの建設で撤去されています。)は小竹は諸侯からの仕官の話がいくつかありましたがすべてを断り、同じ儒者であり謹皇思想に影響を与えた「日本外史」を著者の頼山陽と意気投合して自由にふるまう生活を好みました。



やまがたげんとう  
(30) 山片蟠桃墓 (善導寺) 大阪市北区与加阿

江戸後期の商人、学者。延享3年(1748)～文政4年(1821)。山片蟠桃は大坂を代表する著名な町人経済学者。播州加古川の商家で生まれ、13歳の時に大坂に来て、今橋の両替商河内屋与兵衛方の丁稚になりました。学問好きが評判悪く、北浜の同業 升屋平右衛門、別名 山片重賢に雇われました。平右衛門は「懐徳堂」に出入りしていたため、蟠桃も共に通うこととなります。店ではやがて番頭を任され、経営を立て直すどころか全国の諸大名とも取り引きができる店に発展させました。その後、升屋の暖簾を分けてもらい升屋山片小右衛門と名乗ります。懐徳堂で中井竹山、履軒に学び、麻田剛立から天文学、蘭学を学びます。54歳から書き始め73歳に至るまで書き続け文政3年(1820)12巻からなる『夢の代(いろ)』を完成させます。この「夢の代」は儒仏国学を批判し、天文・地理で地動説を主張。物価・貨幣制度を論じて自由経済政策を説いています。



こんどうそうえつ  
(31) 謹皇志士 近藤宗悦墓 (善導寺) 大阪市北区与加阿

近藤宗悦は長崎出身の虚無僧。尺八の名手で長崎名物チャルメラも巧みに奏したので世に「チャルメラ宗悦」と称されました。壮年の頃、大坂に来て尺八を教授。琴と三味線との合奏を研究し三曲合奏による宗悦流を創始、三曲の祖として今日まで伝わっています。京の明暗寺の僧 玄堂とその弟子の尾崎真龍から思想的な影響をうけ、謹皇派にくみします。その後、文久3年(1863)吉村虎太郎や藤本鐵石らが率いる天誅組の大和 五條の代官所襲撃事件のときは、密かに連絡役を務め、中山忠光らを匿い援助しています。慶応2年2月、明治維新を見ることなく伊丹で没します。墓は、永年無縁墓群にありましたが、昭和期に入り三曲関係者の手によって整備されています。

— 大阪天満宮 — 大阪市北区天神橋2丁目

(32) 大阪天満宮

主神は菅原道真です。菅原道真の死後47年に当たる天暦3年(949)この地に創建されます。

らいさんよう  
(33) 頼山陽筆燈籠 (大阪天満宮)

「常夜灯 嘉永6年6月 願主 殿村氏」と刻まれた燈籠がありますが、筆は頼山陽がとっています。



天満宮の門と頼山陽筆の燈籠